

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」

会報 かいほう ノーフェンス

ひととして、人類の歴史に禍根を残さないために、山の奥に封じ込められ、いのちの尊厳を奪取されている人々を放置しない。



(NO FENCE IN NORTH KOREA)

NO FENCE

E-mail: nf-staff@netlive.ne.jp

NO FENCE

vol. 19

2012年12月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE / 00180-1-707147

読んでください！広めてください！

小川 晴久

10年前から書かねばならぬと考えてきた本、最近ではこれを出すまでは自分の専門の本も出してはならぬと考えてきた本が、漸く出来ました。北朝鮮の強制収容所の存在とその廃絶を訴える本です。その名も『北朝鮮 いまだ存在する強制収容所——廃絶のために何をなすべきか』（草思社刊、1995円税込み）。

都内の大きな書店には11月21日には並ぶと聞いていたので、当日寄ってみましたら、韓国・朝鮮コーナーに、数ある本の中に一冊ありました。しかし、よく探してみないとわからない位で、平台にうず高く積まれる形ではないので、これは口コミで宣伝しないといけないなというのが第一の印象でした。

本書は繻（ひもと）いていただければすぐわかりますが、今年4月3日ソウルで開かれたICNK（北朝鮮の人道犯罪を阻止する国際NGO連合）の国際会議に発表された国際派弁護士J.ゲンサー氏らの国連人権理事会への請願書（4・3文書）の歴大な注を翻訳したことが、本書の刊行の強い促しとなりました。2005年以来の国際社会の北朝鮮強制収容所認識の大きな前進がそれです。序文と第一章にそれを当てました。第二章は本書の副題への回答を箇条書きで示しました。第三章以降が、ここ10年書いてきたものを主題別に配しました。その中には今回書き下ろしたものもあります。

本書のモチーフは勿論北朝鮮強制収容所の人権侵害のひどさに対する憤慨です。こんなひどいことは一刻も早く止めさせなければならないという訴えです。

しかし人権を重んじる人々、第九条を守れと叫んでいる人々、この問題に取り組んでいない現実が、この問題の解決を遅らせています。この人々に早く取り組むように訴えることが、もう一つの大きなモチーフです。

私は19年前に北朝鮮の強制収容所の存在とそのひどさを知り、それ以来皆さんと共にこの問題に取り組み、収容所体験者を日本に招き、

証言してもらってきていますが、まだ拉致問題ほど国民的認識になっていません。公共放送のNHKがニュース特集(一時間もの)でこの問題を取り上げていないことが、国民的認識を遅らせていることを考え、そのことも訴えています。

本書に込めた以上の叫びと訴えが多くの人に、またそれぞれ該当する人に届くことを切に願います。皆さん、力を貸してください。

考えて見ますと、北朝鮮の強制収容所を主題にし、その廃絶を訴えた単行本は、日本ではこの本が始めてではないかと思えます。大変遅きに失した感があります。遅きに失したとしても、まだ北朝鮮の強制収容所は健在なのですから、出さざるを得ない本です。

北朝鮮の強制収容所はなぜ今も健在なのでしょう。あの体制が崩壊しない限り、収容所は廃絶されないと考えている人が多いからだと考えざるを得ません。左翼や人権派の人たちが、この問題に取り組まないのは、戦前36年間の朝鮮支配に関する原罪意識もあると思えますが、それを除けば、このように考えているからではないかと思えます。しかし、これらの人々は収容所体験者の手記を読んでいないという条件が加わります。体験者の手記を読んだら、このような考えは吹っ飛びます。人間として許されない蛮行が行われているからです。この廃絶運動は体験者の手記を読むことから始まります。その上で体制問題とは別にこのような収容所をなくすにはどうしたらよいか、智慧をしぼり始めます。私自身このようにして19年が経ち、やっと廃絶の方法をつかみました。最近数年間の国際社会の認識の前進と行動は、地球規模でそれを証明してくれました。その後押しで漸く本書が脱稿し、実現したのです。

インターネット(アマゾン)による注文ないしは近くの本屋さんで注文して、ぜひご一読下さい。その感想をNO FENCEニュース編集部までお寄せ下さい。

保衛部7局の偽装名は『牧場指導局』に 2000年頃から

宋 允復

10月27日にアジア人権人道学会として明治大学を会場に開催したセミナー『インサイダーが見る金正恩体制の内情 海外派遣労働の奴隷的実態』は意図せぬ反響を呼んだ。質疑応答で「平壤で41人の日本人拉致被害者が監禁状態にある」との証言が飛び出したからだ。

産経新聞は翌28日付1面トップで報じ、

<http://sankei.jp.msn.com/world/news/121028/kor12102811310000-n1.htm>

週刊新潮も11/8号付で特集を組んだ。(末尾の画像参照)

この証言をした金成哲氏(仮名)は2011年10月まで北朝鮮の中央機関に勤務した幹部で

あり、2002年から2007年の間に複数回にわたって日本人拉致被害者に関する情報に接した。それらを総合すると「龍城区域の招待所に男性25人、女性16人、計41人の日本人拉致被害者が事実上の監禁状態にある」とのことであった。

特に女性たちが囚われているのはリンゴの果樹に覆われた区域でその果樹の周りに電気鉄条網を巡らせているという。ただ、これらはあくまで自分の勤務する部局でたまたま聞き得た限りであり、それ以上の日本人拉致被害者の存在如何については分からないという。

メディアの関心はもっぱら日本人拉致関連情報に集中した感があったが、金成哲氏の証言は金正恩が後継者として政治に携わり始めてから彼の名のもとに正式に下した指示を具体的にたどることで彼の指向、発想を浮き彫りにし、人民が嘗めることになった苦難を伝えた。また、27日当日のセミナーでは、実際にロシアに労働者として派遣された脱北者2名の経験談や、ここ1年の歳月をかけ中国、ロシア、中東等で実際に北朝鮮労働者に接近を試み聞き取りをした内容を盛り込んだ包括的な研究報告も披露され、専門家、研究者から好評を博した。姜哲煥北韓戦略センター代表、崔スンミコリア政策研究所研究員、ほか証言をなされた脱北者の皆様に敬意を表す。またごく短期の告知にも関わらずご参集いただき熱心な質疑を展開していただいた西岡力、荒木和博、鄭大均ほか参加各位、報道関係各位にも感謝申し上げる。学会としての開催に労をお取りいただいた川島高峰氏にもこの場を借りて改めて謝意を表す。

宋は雑務でバタバタし時間をさして取れなかったのであるが、収容所関連で金成哲氏から聞き得た話を一つ会員の皆様と共有したい。

1973年の国家政治保衛部創設前まで、収容所は社会安全省9局の所轄であった。

宋「この安全省9局とはいかなる部局なのか」

金「ああ、それは教化局だ」(刑務所を教化所と称するので刑務所担当部局のことと了解)

宋「現在収容所を担当する保衛部の7局は偽装名『農場指導局』と承知しているが、それで良いか」

金「うん？今は『牧場指導局』と称しているが」

宋「いつごろからか？」

金「2000年代半ばくらいか、いやいや確か2000年ごろからそう呼んでいた筈だ」

宋「しかし『牧場』とは何故に？」

金「あの中に入っているのは人間ではないから」

宋「…」

その後、この稿をまとめるため本人に電話を掛け改めて確認したが、「秘密保持のため」ということであった。

たしかに90年代半ば以降「農場指導局」という偽装名は外部に漏れ広く知られるようになったから、秘密保持のために名称変更の必要が生じたのは事実であろう。

またすでに知られている限りでも、収容所内では豚、牛、鶏、アヒルを飼育しており、『牧場』の偽装名に無理はない。

しかし、金成哲氏がこの質問を不意にぶつけられて、「人間ではないから」と答えたのは、彼が北朝鮮にいるときにその名称変更をそういう意味合いとして了解していたということであろうと推察する。本人自身も某収容所で革命化の経験があるとのことであった。

价川の14号管理所の申東赫の経験を見れば、奴隷労働力として優秀な囚人同士を掛け合わせて子供を作らせ、その子供をまた純然たる奴隷労働力として育成している実態に照らして「奴隷牧場」と見ても実態から解離してはいないであろう。

いずれにしても能う限りの情報収集、聞き取りの重要性を実感させられた。

12月15日人権ライブラリーでは4年ぶりに安明哲氏を招いて会寧22号管理所の最新情勢に迫りたいと考えているが、金正恩の政治と収容所との関わりについて宋が愚考するところも提示したい。



NO FENCE 2012年 ファイナル

12月15日 小川晴久出版記念講演

①会寧22号収容所『閉鎖』の真相に迫る
元警備兵 安明哲氏来日 最新衛星写真を解析

②証拠隠滅のための大量飢餓殺人か？
—金正恩と収容所— 報告 宋允復

③講演『北朝鮮 いまだ存在する強制収容所』
—廃絶のために何をなすべきか—

1994年より北朝鮮強制収容所の廃絶を訴え続けた小川晴久の著書が草思社より出版されました。国際社会の目が北朝鮮強制収容所に向き始めた今、改めて「何をなすべきか」思うところを語ります。

④ ディスカッション

参加各位と腹藏なく意見を交換したく思います。

日時：12月15日(土) 午後1時から4時半迄

会場：人権ライブラリー

東京都港区芝大門 2-10-12 KDX 芝大門ビル 4F

電話番号 03-5777-1919

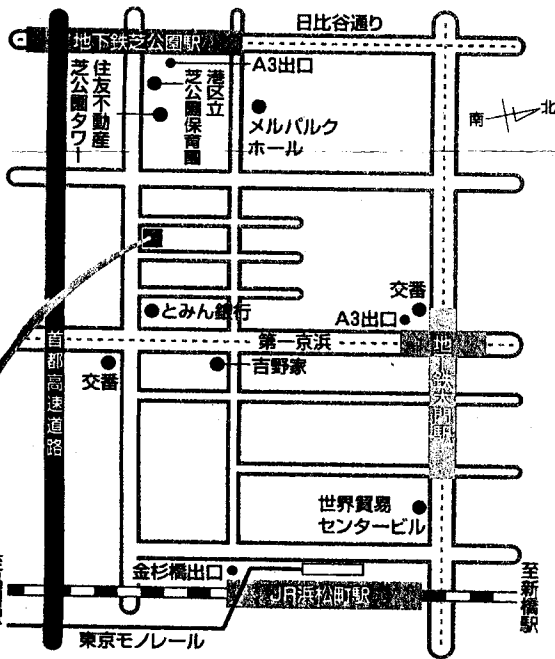
最寄駅 JR 山手線・京浜東北線／東京モノレール 浜松町駅

(金杉橋口から徒歩 7～8 分、北口から徒歩 9～10 分)

都営三田線 芝公園駅 (A3 出口から徒歩 3～4 分)

都営大江戸線・浅草線 大門駅 (A3 出口から徒歩 4～5 分)

所在地のご案内



財団法人 人権教育啓発推進センター

人権ライブラリー

〒105-0012 東京都港区芝大門2-10-12 4F

TEL 03-5777-1919

FAX 03-5777-1954

e-mail library@jinken.or.jp

ホームページ <http://www.jinken.or.jp/>

開館時間 9:30～17:30 (土日、祝日、年末年始は休館)



編集後記

本号は12月15日のNO FENCE主催の案内を出すことを主眼としたため、また期日も切迫していることもあり、少ない記事となりましたこと、お詫言します。

北朝鮮人権特別報告者 ダルスズンさんは去る10月3日報告を出しました。強制収容の問題は次回の報告で中心的に扱おうと予告していますので、NO FENCEの主張を伝えねばならぬと考えています。なおこの報告では申淑子さん母娘の解放を北に求めています。彼女らは連座制の犠牲者です。関連してヨドクを中心に連座制と引き換えに収容者全員の解放を求めています。(小川晴文 2012.11.30)

【最寄駅】

① JR 線 浜松町駅 (南口改札から金杉橋出口徒歩7～8分)

② 地下鉄 都営三田線 芝公園駅 (A3出口徒歩3～4分)

③ 地下鉄 都営大江戸線・浅草線 大門駅 (A3出口徒歩4～5分)



法務省人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん・人KENまもる君

人権ライブラリーは、法務省委託により
(財)人権教育啓発推進センターが運営しております。

人権ライブラリー
(財)人権教育啓発推進センター